本賞

明治に生きた男の生きざまと苦悩を演じ切る

本木 雅弘　河合 祥一郎

本賞を受賞したスペシャルドラマ「坂の上の雲」（NHK）は、司馬遼太郎氏の同名小説をドラマ化したもので、2009年から3年にわたり放送された。日露戦争において大きな役割を担った秋山真之（本木雅弘）を中心に、真之の兄・秋山好古（阿部寛）や、明治を代表する文学者・正岡子規（香川照之）の生涯を描きながら、明治維新を経て近代国家として生まれたばかりの日本が、坂の上に輝く雲をめざして歩み続け、ついにヨーロッパの強国であるロシアと対峙するにいたる物語である。

秋山真之として明治期の日本人の気概と苦悩を見事に演じた本木雅弘さんへ演技賞が贈られた。テレビドラマ番組審査委員長の河合祥一郎さんが、この作品に専念した本木さんの真摯な取り組みとその演技の魅力に迫った。

本木 雅弘 さん（もとき・まさひろ）

1965年生まれ、俳優。映画「シコふんじゃった。」（1992）では、日本アカデミー賞 最優秀主演男優賞を受賞。自らが発案した映画「おくりびと」（2008）では、米アカデミー賞外国語映画賞はじめ、国内外の賞を受賞。以後、NHK「坂の上の雲」（2009～2011）、TBS日曜劇場「運命の人」（2012）など、数々の作品で活躍している。

河合　演技賞受賞、おめでとうございます。

本木　ありがとうございます。この作品は、構想を含めると11年がかりのものです。スタッフ、出演者をはじめとする多くの思いと労力をかけた大舞台に立たせていただき、こうして個人賞までいただけるのは本当に光栄です。

河合　3年間という長い年月に亘って秋山真之という役に集中した本木さんの意気込みや気概が、まさに秋山真之の気魄となって結実していたように感じました。

実在の人物、秋山真之を演じるにあたって

河合　オファーがきた時は、台本はできていたのですか？

本木　いいえ。演じるにあたってまず司馬さんの原作から読み始めました。一国を築き動かしていく強い志や行動力、また軍事戦略や人事を、経済や会社組織の戦略とリンクさせながら経営者のバイブルとして読む方も多いと聞いて、気負って読みました。

河合　『坂の上の雲』の撮影の間、他の仕事をなさらずこの作品だけに集中したと伺いました。これだけの長い時間をかけてひとつの役を背負うということは、役者人生の中でも稀有な経験だったのでしょうね。

本木　そうですね。最初は、かなり不安もありました。通常ですと約３か月で１本の作品を仕上げるのですが、この作品は３年という時間ですから、まず自分のモチベーションが維持できるのか、他のチャンスを捨ててもいいのか（笑）など、心配はありました。

実際に、海軍の出番がなければ主演といえども、１か月半ほど撮影がないこともありまして…。でも逆にその期間に何度も原作や史料を読み返すことで、自分の中に役を深く浸透させていくことを味わえました。ただ、実在した人物であり、司馬さんの書いた秋山真之、またテレビ版として届けたい真之像があるなかで、演じていく上では随分と苦労し、混乱もしました。

河合　３年間もの長い時間を費やすと、役と自分自身との距離がなくなってくるのではないかと思うのですが、いかがでしたか？

本木　元々『坂の上の雲』は、現実の自分とは距離のある作品でした。撮影当初は、実在した偉人を演じるという気負いが空回りしていました。どんな役でも仮に虚構の人物を演じるにしても、現代の自分となにか通ずるような、大げさに言うと普遍的な人間性を掴みたいと思いながら演じようとするのですが、のちの偉人で天才肌、また奇人的な要素もあった強いキャラクターをつくらなければという狙いがまとまらず、なかなかうまく取り込めなくて苦労しました。

明治の男の生きざまを考える

河合　この作品は、男はこう生きなければならないというような明治の男としての気概や生きざまがとてもよく描かれています。それと同時に、この時代には強い個性、つまり、俺がやらねば誰がやるという精神も強くあったと思います。でも現代では、男として生きるのではなくて、人間として生きる時代になってきています。真之を通して、明治の時代をどうお考えになりましたか？

河合 祥一郎 さん （かわい・しょういちろう）

テレビドラマ番組審査委員長。東京大学大学院教授。専門はイギリス演劇、英文学、表象文化論。著書に「ハムレットは太っていた！」（白水社、サントリー学芸賞受賞）など。

本木　明治初期の人たちは、江戸時代の教育や親からの教えを受けて成長してきたわけですよね。江戸時代では儒教の教えが中心にあって、そのなかの「修身・斉家・治国・平天下」が基本的に身についている。要するに、自分を磨けば（修身）、家庭を整えられ（斉家）、そうすれば国家は治まり（治国）、最終的には平和が訪れる（平天下）という考え方です。真之は、明治元年生まれで新時代の人間だから自分には武士的素養が足りないと言っていますが、その一方で、儒教の教えが自分の基盤にあり、且つ新しい考え方も吸収した。そこが強みだとも言っています。

何かで読みましたが、真之が生きた時代は、集団的感動の時代で、自分の志と国の目標が重なっていて、公私のバランスがうまくとれていた時代だったのだと思います。

河合　真之が生きた時代は、女性観も現在と全く違っていました。例えば、真之も兄の好古も35歳まで結婚しないと言っていたのは、結婚すると男としての覇気が弱まってしまうと考えていたからですね。

本木　そういう時代の考え方もあったと思います。特に真之の場合は、兄・好古の影響は強かった。好古のほうが断固として古武士的な考えを貫いていたので。若い時に父を亡くした真之は、好古の背中を見ながら男として育ったところがあ

りますよね。

河合　明治の男の精神のようなものは、本木さんのなかにありますか？

本木　そういう勢いはほとんどありません（笑）。豪放磊落な雰囲気が自分にはなくて、そもそも軍人は自分に向いてないんじゃないかと思ったりしました。

河合　そうですか？　秋山真之と本木さんはぴったり重なって見えましたけれどね。

本木　キャスティングの理由を率直に聞いてみたことがあります。すると、スタッフ曰く、望んでいるのは強さだけではないと。『坂の上の雲』は、大きな志を持って進んで行ったその先に何があるのか、その過程で何を感じ、何が見えるのか、というお話です。日本人の魅力や能力を語りつつも、ただ上に登っていくのではなく、最終的には真之を軸に、ある無力感や矛盾を描いていく。そういうものを感じるためには、ある種の弱さを持ち得ていないといけなくて、司馬さんも「喧嘩好きの真之は、これほどの闘争的性格に生れついていながら、人の死からうける衝撃が人一倍深刻で誰よりも傷つく」と書いています。真之には、そういったひ弱さがあると…。

河合　それはひ弱さなのでしょうか？

本木　ひ弱さと言ったり繊細さと言ったり、いろんな表現があると思いますが、それがなければその矛盾に悩まされません。善し悪しは別にして、真之は最終的にそこに陥った。彼なりにもっと深く考え込んで宗教的な命題を持つまでになっていく。

河合　そこまで悩むようなことというのは、普通はないでしょうね。

本木　でも、そういったひ弱さから生まれる人間的な揺らぎこそ、自然だし、魅力のひとつだと思います。

私自身、いくつになっても悩める青年というような自覚がありますので、求められたのはその辺かな（笑）？…と。

積み上げた時間が演技への自信を深める

河合　いろいろと史料を集めて勉強されたそうですが、どんな風に役に取り入れていかれたのですか？

本木　具体的なエピソードですと、第２部で真之が海軍大学校の教官となり、指揮官となる人たちを教育していく立場になった時の場面で、「無識の指揮官は、殺人者なり」という台詞があるのですが、もともと台本にはなかったんです。真之の講義が非常に名講義だったと聞いて、どんなことを実際に話されていたのかを知りたくて講義録を見せていただいたんです。あれは、その中にあったフレーズです。講義録を読むと、真之は自分が想像していたよりもはるかに強烈なことを話していました。印象的なフレーズに私がいくつか線を引いていたのを監督さんがみつけて、台詞になりました。

河合　秋山真之像をしっかり捉えるために、海上自衛隊の幹部候補生学校に行かれたり、講義録を調べたり、本当にひたむきな取り組みをなさったんですね。

本木　役者の役へのアプローチとして、もらった脚本の中だけでイマジネーションを膨らませる人もいれば、私のようにとりあえず史料を集め、創作の糧にするタイプもいる。出来れば、史実を知った上で演じたい…と、私はそういう流れを踏まないと自分がただ不安でならないんですね。あの地味な作業は、自分の中に自信を積み立てるためなんです。

河合　積み上げてきた時間が、自分を支える自信になっているわけですね。

本木　でもこだわりたいのは、役の人物の佇まいというか、なにげない仕草であったり、その人物がかもし出す雰囲気です。カメラの前に立った時に何かが匂い立つようなその役らしさというか…。しかし、なかなか難しいですね。

そこを探るために懸命に読み聞きしても、結局それを表現する技術は見つからないんです。そもそも不器用だし、いくら勉強しても表現できなかったと落ち込むことが常なんです。

河合　それは謙遜しすぎです。緻密で魅力ある演技として結実していたと思います。シェイクスピアのフレーズに「馬鹿は自分のことを賢いと思い、賢明な人間は自分が愚か者であることを知っている。」とありますが、自分が足りないと思っている人間ほど、高みにいるものです。

やるべきことを決めたら貫く

河合　また、司馬さんがこう書いているんですね。「決戦は僅かに 30 分であるが、これに至らしむるには 10 年の戦備を要するので、すなわち取りも直さず連綿 10 年の戦争である。」

これはいわば５分のテイクのために、３年間の時間をかけて連綿と続けてこられた本木さんのひたむきな取り組み、生きざまが、まさに真之そのものの生きざまに重なるということです。

本木　そう言っていただけると救われます。

河合　真之や好古といった明治の男の生きざまを見ると、自分がそういう時代に男として生きてみたかったなどと考えたりもするのですが、本木さんは個人的にどうですか？

本木　それは憧れます。単純に言えば太く短く生きて、与えられた使命を全うするという達成感の中で生きてみたかったですね。今はどうしても、すべてバランスを取ろうとして、がんじがらめになりますよね。

河合　そういう意味ではこの３年間は、他のことを断ち切って、太く短く明治的な生き方だったのでは？

本木　そうだったかもしれないですね。好古が真之に言っていた単純明快、自分がやるべきことを一つ決めたらあとは余興にすぎぬ、というような。

直之と向き合い、ひたすら追及した日々だったと言えるかもしれません。

河合　最後になりますが、今後はどのような役をされたいとお考えですか？

本木　そうですね、真之は常に忙しく思考している人だったので、もう少しいい加減なといいますか、その日暮らし的な役柄を演じるチャンスがあればいいなと思います。

河合　視聴者の方も、多才に役をこなす本木さんの活躍を楽しみにしていると思います。今後もぜひご活躍ください。

今日はありがとうございました。